〈第 40 回定期大会シンポジウム〉

ラテンアメリカ研究

——地域性と学際性を架橋する経験から導かれるもの——
(2019年6月2日、創価大学)

コーディネーター	井上大介 (創価大学) 池田光穂 (大阪大学)
パネリスト	太田好信 (九州大学) 大串和雄 (東京大学) フランシス・ペディ (名古屋大学) 吉田栄人 (東北大学) 中村誠一 (金沢大学) 小泉潤二 (人間文化研究機構・大阪大学名誉教授)
コメンテーター	落合一泰 (明星大学・一橋大学名誉教授)

(各人の所属はシンポジウム開催時のもの)

井上大介: 皆様、こんにちは。只今より日本ラテンアメリカ学会第40回定期大会記念シンポジウムを開会いたします。私は本日、大阪大学の池田光穂先生と総合司会を務めます創価大学の井上大介と申します。どうぞ宜しくお願い致します。それでは早速、私のほうから本日のシンポジウムに関する開催趣旨を述べさせていただきます。

本年のシンポジウムでは「ラテンアメリカ研究——地域性と学際性を架橋する経験から導かれるもの」と題し、文化人類学研究、政治学研究、宗教学研究、考古学研究等の分野でラテンアメリカ研究に従事されてきた研究者の方々に、自身とラテンアメリカ研究との出会い、研究テーマ、現地との関係

性、それによって自身が受けた影響、また現地に与える影響といった点について、本人の研究や教育、また自身をめぐる身体性や政治性、さらには自身がめざす学問の社会貢献について語っていただきます。70年代において学際研究が強く意識され、80年代以降は学際研究の困難さから、それぞれのディシプリンにおける専門化が優先されていったとされる地域研究に対し、ラテンアメリカを対象に研究活動をおこなってきた我々が、学際研究の可能性も含め、今後どのように向き合っていくべきかという点についてそれぞれの「経験」から論じ合って参ります。このような議論を通じ、ラテンアメリカ研究とは何か？ ディシプリンと地域研究との関係をどのように考えればよいのか？ 今後のラテンアメリカ研究はどうあるべきか？ 地域研究、学際研究やその他の地域研究者との連携をどのように推進していくべきか？ などのテーマについて、次世代へのラテンアメリカ研究の継承という課題とともに再考して参りたいと思います。

なお本日の発表者は九州大学の太田好信先生（文化人類学）、東京大学の大串和雄先生（政治学）、名古屋大学のフランシス・ペディ先生（歴史学）、東北大学の吉田栄人先生（先住民文学）、金沢大学の中村誠一先生（考古学）、大阪大学名誉教授の小泉潤二先生（文化人類学）となります。またコメンテーターとして明星大学副学長の落合一泰先生にご登壇いただきます。

それでは各先生にご登壇いただきたいと思います。宜しくお願い致します。

「夢から倫理へーフィールドでの出会いにおいて何を託されたのか」

太田好信

記念シンポジウムの主催者である井上さん、今日をご招待いただきありがとうございます。また、ご参集いただいた皆さま、九州大学で文化人類学を担当している太田好信です。ラテンアメリカにおけるフィールド調査地とい

うことでいえば、グアテマラ共和国のマヤ・カクチケルの人びとの間で研究をしてきました。どうぞよろしくお願ひします。

手元にある「開催趣旨」を読み返してみると、ご招待に喜んで応じたものの、わたしのような者が登壇するべきなのかどうか、いま一度自問せざるをえません。

しかし、自分の能力の限界を自覚しつつも、今日は表題にあるような、少し奇妙なタイトルでお話しすることをお許しいただきたいと思います。内容は、夢という個人的経験から始め、倫理の面から知のあり方を問ひなოსという道筋をたどることです。今日のお話は、一つの問ひを示すことが終着点になります。その問ひに答えるには、まだ時間がかかりそうです。ただ、その問ひについて考え続けることの方が、安易に答えをえたと早合点するよりも、大切な気がしています。

夢について考え始めたきっかけの一つは、ここ何年かの間、盛んに報道されるようになったアイヌ遺骨返還運動について学ぼうと、グアテマラでのフィールド調査時のノートの一部を読み返えしてみたいと考えたことです。

2003年8月末、チマルテナンゴ県コマラパ町近くパチャッフ (Pachaj) のトウモロコシ畑でのことです。周辺の集落の人たちにとり、そこには、内戦中に行方不明になり、軍によって暴行、殺害された犠牲者たちが眠る「秘密墓地」(muqb'äl) があるというのは、公然の事実だったそうです。

発掘は一週間ほど続きました。毎日現場に駆けつけていた高齢女性二人と顔見知りになり、そのうちの一人エステファナさんが次のように語った、とノートには記載されています。

「昨夜、20年も前に連行され行方不明になった息子が、夢に現れました。ここは寒いから、早く出してくれとっています。だから、こうして息子に会うため、やってきたのです」。

エステファナさんは、夢のなかで息子に出会っていたことになります。20年間も行方不明の息子と、たとえ夢のなかであろうとも、ことばを交わすこ

とができた母親の喜びは、想像にかたくありません。フィールド調査中、マヤの人たちの間では夢が現実の隠れた事実を示すのだという話をよく耳にしていたので、わたし自身、妙に納得していたようです。

しかし、当時、わたしは、エステファナさんにとり、息子は夢でしか会えることができない存在になってしまったことを見過ごしていました。生死すらはっきりしない、だからこそ、もしかしたら明日にでも、難民となり生活していたアメリカ合州国から元気な姿で戻ってくるのではないか、という一縷の望みを捨てきれないのも親心でしょう。実際に、そんな行方不明者の帰還を報道する番組は、グアテマラのテレビ局カナル・トレス（Canal 3）でも放送されていたそうです。そんな彼女にとって、夢は現実の欠落を埋める大切な力をもっていたのかもしれませんが。

そして、夢が現実の欠落を埋めると考えるようになったのは、わたしにも夢でしか会えない人たちがいるからです。たとえば、わたしにカクチケル語の指導をしてくれたトマスさん。1998年、当時のわたしの関心は、和平合意後のグアテマラにおける汎マヤ・アイデンティティの形成でした。そのなかで、言語復興運動は重要な位置を占めていました。アンティグアのフランシスコ・マロキン言語プロジェクトの所長に相談すると、カクチケル語の教師としてトマスさんを紹介されました。彼は、わたしより2歳年上です。

それ以来、彼との長い付き合いが始まりました。トマスさんは、わたしが出会った多くのカクチケルの人たちと同じように、自分は農民（*tikonëil*）だといいます。しかし、彼はカクチケル語の有能な分析者でもあり、マロキン言語分析プロジェクトから出版された『カクチケル語辞典』（1998）にその名前が協力者として明記されています。

後に知ったことですが、カクチケル語の分析とマヤとしての政治意識とを結びつける活動をしていたマルティン・チャカッチさん（*Martin Chacach*）にリクルートされ、トマスさんは自分の住む町からアンティグアまで片道3時間かけ、言語分析セミナーにかよったそうです。

また毎年開催されるチューレン大学主催のカクチケル語夏季講座（*Oxila-*

juj Aj) でも、人気教師の一人でした。おそらく、その理由は彼が言語教師として辛抱強かったからだけではなく、町の歴史や昔話など、マヤ文化全般について対象化し、語ることができたからでしょう。彼は、婚姻に至る大事な一連の儀礼の一つで、新婦の両親との交渉役 (k'utunel) を依頼されることも多く、よどみのない口上を述べていた光景が目には浮かびます。

トマスさんは、わたしにカクチケル語を教えることに熱心でした。毎年、数週間だけ自分の生まれた町に滞在し、日本帰国後は、日常生活などで自分が一生懸命教えたことばを利用する機会などないと知っていたにもかかわらず、辛抱強く、指導してくれました。

近隣の小さな村々で教えている教師のなかに友人がいれば、それらの小学校を訪問したことも数多くあります。初等教育のレベルで言語復興がどのように進んでいるのか、というのはわたしの調査の一環でした。訪問したおりは、かならず、小学生に向け、わたしが町にやって来た理由について、日本の社会について、カクチケル語で話す機会が与えられました。アジア人が必死になり下手なカクチケル語を話す姿は、子供たちにとり、一種の娯楽であったに違いありません。と同時に、トマスさんはわたしが彼の生徒として努力してきた成果を誇示したかったのかもしれない。

彼が大酒飲みだとは、長い間知りませんでした。ある夏、町の人から、「誰から習っているんだい? (¿Achike ntijon awichin?)」と問われ、「トマスさんですよ (Ja, Ma Tomas nujitonel)」と、誇らしげにわたしは答えました。その人は、「トマスはまた酒を飲みだしたよ。いま彼は、ただの酔っ払い (q'ab'arel) さ」と応えました。数週間前まで、家にも帰らず、道端で寝ていたというのです。家族の人たちは、わたしにはトマスさんがアルコール依存症だとは、一言もいみませんでした。

そういえば、5 km ほど離れた隣村の小学校を訪問した日、帰路の山道に一軒家があり、家主は密造酒販売者 (tzakonel) だというので、彼はその民家で酒を買い求めていました。トマスさんは「酒は、疲れを取るなあ (re aq'om re relesan richin kosik)」といいながら、その場で買った酒を一気に飲み

干したことを思い出します。

2013年の夏、わたしにとりそれが町に滞在した最後の夏です。彼との再会を喜びましたが、彼は頭部に大きな傷を負っていました。自分でも覚えていないというのです。家族は、酒に酔って外出し、戻ってきたときは血まみれだったと説明してくれました。

いまではグアテマラのあの町を訪問する機会がないわたしは、よくトマスさんの夢をみるようになりました。いつものように、わたしは彼に必死にカクチケル語で話そうとしますが、口がまわりません。発音がうまくできないのです。そんなとき、決まって、自分の寝言で目覚めます。トマスさんは、もう夢のなかでしか会えない人になってしまいました。2016年、アメリカ人研究者の知人から、トマスさんの妻は糖尿病で亡くなった、と知らされました。

それにしても、わたしがいまだに理解できないのは、トマスさんがわたしに熱心にことばを教えてくれ、調査に関心をもち、フィールドでの案内役を務めてくれたことです。そして、そんな彼の努力への返礼とは、どのようなかたちをとるのか、という疑問について、最後に、考えてみたいと思います。

カナダの若い先住民歴史家アイゼア・ウィルナーは、フランツ・ボアズがカナダ北西海岸地帯でおこなった調査結果をボアズのインフォーマントとして有名なジョージ・ハントとの関係を通して読み直すという、いわば「先住民エイジェンシーを回復する」研究をしています。ボアズがカナダ北西海岸地帯でのフィールド調査を開始したのは、1886年でした。それから2年後、1888年、彼は（トリンギットの母と白人貿易商との混血の出自をもつ）ジョージ・ハントと知り合います。1860年代、天然痘の影響による人口減少、それに伴い社会組織の崩壊に瀕したクワクワカワク（Kwakwaka'wakw、ボアズはKwakiutl「クワキュトル」と表記）人たちは、ポトラッチ（やHamat'sa dance ハマツツァ・ダンス）を始めました。ハントは、急速に変容するクワクワカワク社会を記録したいという思いをもっていました。

ちょうどボアズも自らの関心をクワクワカワク社会におけるモノから、宗教や神話、歌や踊りといった精神世界やパフォーマンスへと変化させつつあったときでしたから、ハントと意気投合したのは無理からぬことだったのでしよう。

ウィルナーによれば、ボアズはハントやクワクワカワクのチーフたちに導かれるようにして、自らの考えを変容させたといえます。ボアズは自らの思考の変化を、1911年に刊行されたボアズの著作『未開人の精神』(*The Mind of the Primitive Man*)において、互酬性という双方向性を通し、文化が連結しているイメージとして提示しています。このイメージは現在の「多様性」という概念にきわめて近いというのです。

当時の近代知は自己(文明)と他者(未開)というコロニアルな支配、非支配の構造を前提にしていました。それは相互関係の否定であり、互酬性の欠如ともいえます。つまり、クワクワカワクらは文化人類学という知に、コロニアリズムの前提とは異なったホストとゲスト、互酬性、そして変容という諸概念を託し、西洋社会に広めようとしたといえます。21世紀では差異に代わり、繋がりと相互依存を含意する新しい価値観として広がりつつある「多様性」という考えは、「先住民起源」(*the indigenous origins of global consciousness*)である、とウィルナーは結論づけています。

もちろん、ハントとボアズとの関係を引き合いに出したの、トマスさんとわたし自身との関係に重ね合わせ、わたしたちの関係を語りたかったからではありません。それは誇大妄想だ、とわたしが真っ先に認めます。ただ、ウィルナーとわたしのそれぞれの歴史における立ち位置は異なるものの、彼の解釈を読んだ後では、夢に現れるトマスさんは、わたしに何を託したのかという問いを、わたしも考えざるをえなくなりました。その問いに簡単に答えられませんが、次のように反省するようになりました。

わたしは、呼ばれてもいないのに、グアテマラへとフィールド調査に出向きました。わたしのフィールド調査は、トマスさんをはじめ、町に住む多くのマヤの人びとから無償で与えられた「救し」によってはじめて可能になり

ました。しかし、わたしはその赦しを当然の権利として誤解し、文化人類学という自らの知的探求心を最優先にしてきました。振り返れば、トマスさんの善意を利用してしまった気さえします。わたしはこのように反省を迫られていると感じています。

わたしには、何が不足していたのでしょうか。いま述べた反省を踏まえれば、倫理を主軸に据えた知のあり方を模索することだと考えています。それが欠けていたというわけです。冒頭で触れたアイヌ遺骨返還運動について学ぼうと、ふたたび学知に内在する植民地主義が批判されていることを知りました。その批判は、先住民を研究対象としてきたすべての学問に向けられているとあって過言ではありません。先住民は消滅寸前にあるという前提のもと、形質人類学は人骨を、考古学は器物を、文化人類学は（広い意味での）文化を、それぞれ収集対象にしてきました。わたしはこの批判を無視できず、わたしの変化などはボアズに比べようもないものですが、それでも「人類学的無垢」を失い、代わりに（デイヴィッド・スコットがスチュアート・ホルの思考の根底にあると認めた）「悲劇的感性」を獲得しました。それは、わたしにとり、敗北と諦念が生みだす対象へのオープンで、謙虚な姿勢なのです。

そんな反省から、最近では「アイヌ民族に関する研究についての研究倫理指針」（仮）の検討委員会にも参加しています。倫理といえば、研究者の不正を戒めるなどの文脈で議論されることが多いのですが、ここではそういう意味で倫理ということばを使っているわけではありません。倫理の中心にあるのは、地域性や学際性という考えよりも、関係性といえるでしょう。関係性は、他者とともに住まうことが可能な世界を想像することを含意します。たとえば、倫理はコロナリズムが可能にしてきた「研究の自由」を（ガヤトリ・スピヴァクのことばを借りていえば）「損失として学び直し」、（ジュディス・バトラーの表現にならえば）不自由を肯定すること（we affirm unfreedom at the heart of our relations）から研究対象と新たな関係を構想しようとしています。

文化人類学とラテンアメリカ研究の領域で新しい関係性を模索するといえば、チャールズ・ヘイルが「アクティヴィズムと文化批評」との対立を一つの分断線として描きだしていたことが頭に浮かびます。そこで彼は、アクティヴィズムの重要性を主張しています。しかし、そのような分断線は「研究者」間に存在するものであり、わたしが修復したい分断線ではありません。そもそも、研究主体に知の根拠を結びつけているかぎり、アクティヴィズムは温情主義、一方的な啓蒙、さらには自らの正当性を疑わない傲慢さなどへと横滑りしかねないでしょう。

課題は、他者からの影響を受けることへ開かれた関係性の模索です。倫理にもとづく研究とは、エマニュエル・レヴィナスのいうように「あなたは誰ですか」という問いかけが、わたしの存在に先行すると考え、その問いに応えることから始まるのです。研究対象の声に耳を傾け、その声に応える責務を負う存在として、わたしを受動的に位置づけることだと考えています。

もし、「あなたは誰ですか」という問いが、コロニアリズムを批判する目的で発せられるなら、アクティヴィストであろうがなかろうが、現在のわたしのアイデンティティを叙述することにとどまるだけでは不十分でしょう。「わたしはどのような存在になれるのでしょうか」とアドリアナ・カヴァレロが示したように、他者の求めに応じ、自己の変容可能性へと開かれた姿勢が、ポストコロニアルな知の関係性を想像するためには必要となるでしょう。他者の問いかけに応じて変容しようとする自己がなければ、知の脱植民地化は困難ではないでしょうか。

最後に、ボアズに関する異なった評価について、一言だけつけ加えておきたいと思います。彼は、生体計測や墓暴きをおこない、さらに収集した遺骨の交換やその販売にまで関与していたことが広く知られており、今日、遺骨返還を求める先住民の活動では批判の対象となっている人物です。それらの批判は、正当です。しかし、反対に、先住民歴史家ウィルナーの描くボアズは、未知へと開かれた応答の姿勢を示す人間であり、自らも変容するように人類学をもコロニアルな知の配列から逸脱させようと努力する人物です。こ

れら異なったボアズ像は、彼の清濁含めた多様な人間性を示すというよりも、彼が変容する存在であったことを意味しています。現在、人類学に関わることを選択したわたしたちは、いま述べたボアズへの批判も含め、この学問が背負う過去について苦悩する運命を引き受けざるをえません。無視すれば、それは反省を欠いているといわれるでしょう。先住民と学知との関係がいまだに閉じられてはいないという希望を見出すためには、その運命を甘受しつつも、それに抗い、ただ運命の犠牲になることを拒む姿勢、つまり新しい人類学を創り出す努力が求められることとなります。

時間がきました。最後は多少脱線ぎみの結論でしたが、今日のわたしの話は、ここまでにしたいと思います。ありがとうございました。

「私にとってのラテンアメリカ研究—政治学の立場から」

大串和雄

井上先生から登壇の打診をいただいた際に、絶対にミスキャストであると思いました。私の個人史をご紹介しても、ひとさまの参考になるわけがありません。しかし自分史ということなので自分が知っていることですから、「私はそのテーマについて詳しくありません」と言ってお断りすることもできませんので、お引き受けした次第です。

私の場合、大学に入学する前から政治に関心があり、学部学生時代に発展途上地域における政治の研究を志すようになりました。大学院に入ってから、いずれかの地域を選ばなければならないということで、ラテンアメリカを選択しました。ですから私の場合は、ラテンアメリカとの出会いが先にあったのではなく、政治が先にあったということになります。しかしきっかけはどのようなものであれ、一旦現地に赴いて研究を始めればその地域にのめり込んでいくものだと思います。私の場合もそうでした。研究テーマに関しては、発展途上地域で抑圧された人々への関心から、最初の研究テーマは軍事政権でした。私の大学院入学は1980年ですが、その当時はまだ軍事政

権が多数存在していました。その中で、どのケースを選ぶかという段階で、少し毛色の変ったペルーの軍事政権を選ぶことになりました。その後は、社会改革に対する関心から社会運動や左翼思想などを研究し、今は人権問題、その中でも特に移行期正義を中心に研究しています。

自分が研究から受けた影響というのはよくわからないのですが、多分研究から受けた影響というよりは、ラテンアメリカの人々から受けた影響があるような気がします。自分の研究をどのように地域や人に還元できるかということについては、まず、月並みですが、依頼に応じて寄稿や講演をすることはあります。それから、教育を通じて社会還元しております。人権問題にせよ、発展途上地域の政治の実態にせよ、学生は白紙でありまして、想像もつかない、あるいはトンチンカンなイメージを持っていることがしばしばあります。ですから還元する余地が大きいと同時に、理解の溝も大きいので、結構苦労しているところです。ここまでは日本社会に対する還元の話ですが、ラテンアメリカへの還元に関しては、さらにできておりませんので、今日は皆さんの前で反省を迫られる日になっております。

ディシプリンと地域研究との関係については、皆さんに配布した文章を読み返してみても、「最近の学生は」とか「若い研究者は」とか、「これって老人が執筆した文章じゃないか」と思いましたが、最近の学生や若い研究者みんながそうだと思っているわけではありません。特に今日ここにいる人たちはそういうことはないと思っておりますので、どうか気を悪くならないでください。

私自身は、政治学というディシプリンと地域研究の二股を掛けるつもりでやってきました。ただ政治学というディシプリンそのものに学際的な面がありまして、様々な分野から知見や理論的な道具を借りることが頻繁にあります。また、今私が研究している移行期正義などは完全に学際的なテーマで、さまざまな専門の人がやっておりますので、普段特定のディシプリンを意識するということはあまりありません。政治学というディシプリンについては、これは社会科学に共通していると思いますが、定量的方法やフォーマ

ル・モデルの開発が進み、それらの「科学的方法」ではない研究を軽視するという、不健全な傾向が出てきていると私は感じております。さらにもう一つの深刻で不健全な傾向は、研究対象地域の政治を虚心に観察して、そこで起こっていることを理解しようとする態度が弱くなっているのではないかということです。もし私のこの印象が正しいとすれば、考えられる理由が二つほどあります。一つは、統計的手法やフォーマル・モデルなどの手法の枠内での整合性が最優先されるということです。現実には、その理論で言っていることと矛盾しなければよいくらいの位置付けで、理論と矛盾しなければ理論が「実証」されたことになるという態度であって、現実を一生懸命理解しようとする、一生懸命何かを汲み取ろうとする姿勢ではないように思うんですね。第二の理由は、キャリア志向とでも言うんでしょうか、真実に近づこうというのではなくて、理論的に辻褄が合うという形で自分の主張が正しいと言えればよいというように、自分の説が正しいことを主張することが自己目的化しているように思われることがあります。それが時にこじつけ的な主張にもつながります。

今お話ししたのは政治学全体の傾向です。ラテンアメリカ研究にとって幸いなことに、ラテンアメリカ政治の研究者たちには、このような弊害がそれほど強く現れていないように思います。ラテンアメリカ政治の研究者たちも計量分析など新しい手法を使用するようになっていますが、ラテンアメリカ研究者の場合はそのような研究でも現実をしっかりと観察して、それに基づいた理論を展開しているので、違和感なく読めることが多いですね。それは、ラテンアメリカ研究者が、「政治学者兼地域研究者」という姿勢を堅持しているからだと思います。

新しい手法それ自体が悪いのではなく、それをを用いる時の態度の問題、現実をしっかりと見ようとするかどうかという態度の問題なのです。奇妙なことに、現実から虚心に学ぼうという態度が弱まる傾向は、いわゆる「科学的方法」の研究者だけでなく、定性的研究の方にも見られるという印象を持っております。定性的研究のほうでも、政治学だけとは限らないのですが、ポス

トモダンのあるいは哲学的な言辞を弄して理論家を気取ることがあります。問題は、それらの定性的研究の理論が、現実をよりよく把握するために機能するのではなく、理論的あるいはイデオロギー的な色眼鏡で現実を見て、現実を歪めて意味づけすることが増えているように思われることです。単なる邪推かもしれませんが、こういう傾向はもしかすると、理論的なものに対するコンプレックスに由来するのではないかとも思ったりします。つまり最近では「ディシプリンがない」とか「理論的でない」ものを見下すような傾向がありますので、そうした態度への対抗心から、「科学的方法」とは別の方向で「高尚な」「理論化」に向かっているのではないかということです。

地域研究は学際的（マルチ・ディシプリナリー）だという考え方がありますが、私は「没ディシプリン」的な地域研究もありうると思っています。理論はなくても、その地域のことはとにかく深く、正確に理解しているというタイプの研究です。それは大変なことだと思います。質の悪いディシプリンの研究やマルチ・ディシプリンの研究よりも、良質の「没ディシプリン」的研究の方が社会的にもはるかに意義が高いと思います。

結論として私のメッセージは二つあります。一番大事なメッセージは、とにかく現実を虚心に観察して、現実で起こっていることを見極めようとする態度を取り戻そう、または堅持しようということです。二つ目は付随的なメッセージになりますが、「没ディシプリン」的な研究であることを恐れるなどということです。これは理論やディシプリンをやめようということではなく、必要がないのに無理に理論を気取る必要はないということであり、また何よりも、それによって現実を虚心に観察する態度が弱まってはいけないというメッセージです。

研究におけるポジショニングに関しては、私は研究において価値中立性は不要だと考えております。マックス・ウェーバーが「価値自由」について書いていますが、価値観の優劣は学問の領域ではないとか、価値観が研究の客観性を歪めてはいけないという意味での「価値自由」は、社会科学の研究にとって必須の条件です。しかし「価値中立性」という言葉で、およそ研究者

は特定の価値観を持つべきではないとか、ある価値観に従って研究テーマを選ぶのはよくないと主張する人もいます。そういう意味での価値中立性なら、それは必要ない、客観性が大事なのであって、中立は必要ないと思います。ただし、価値にコミットすることにはリスクもありまして、価値や望ましい結果へのコミットメントが認識の客観性を歪める可能性がありますので、自分の見解を批判的に問い直す努力を意識的にしなければなりません。また、よりプラクティカルな問題として、具体的な争点について立場を明確にすると、その立場に反対の人からインタビューなどの研究上の協力を得られにくくなるというリスクがあります。そのトレードオフについては、各自がそれぞれの人生哲学に従って選択するしかない問題だと思っております。以上です。ありがとうございました。

「ラテンアメリカ研究——地域性と学際性を架橋する経験から導かれるもの：歴史学／Historia」

フランシス・ペディ

皆さんこんにちは。私は歴史学の立場からお話しします。ラテンアメリカ研究に従事していますのでラテンアメリカを対象とした歴史学についてお話しますが、私の出身でありますカナダについても研究をおこなっており、アメリカ全域にも関心をもっておりますのでその点ご承知ください。歴史学のディシプリンなどについてもお話しますが、まず教育、研究についてお話しします。

歴史学は非常に時間、空間、研究対象に対し柔軟な学問です。私の修士課程はメキシコ国立自治大学でして、研究テーマは第二次世界大戦期におけるメキシコの日本コロニーです。博士課程はカナダのヨーク大学で、カナダにおける亡命チリ人について研究いたしました。現在は、ここにいらっしゃる落合先生と過去50年間の日墨学生交流プログラムについての共同研究に従事しています。私の個人的研究経歴はインターディシプリンのかつインター

リージョナル的なものであります。このような特徴は歴史学、特にラテンアメリカを対象とした歴史学的研究ではごく一般的な特徴とも言えるのではないのでしょうか。歴史学における柔軟性をあらかず特徴の一つとしましてはこのような国家の枠を超え、地域を越え、また学問分野の枠を超えするという点にあります。学校教育における歴史の授業は通常、伝統的かつ国家的な枠組みで行われます。国家の歴史、政治、経済、戦争など。非常に退屈なデータで満ちており、子供たちはうんざりしてしまいます。空間的に制限され、テーマや登場人物についても限定的なものととなります。政治的リーダーや大きな出来事が中心となりますが、それ以上の情報は与えてくれません。

しかし歴史研究においてはその限りではないのです。歴史学には非常に柔軟かつ学際の特徴があるのです。チリの歴史家ラファエル・ペデモンテの *La Guerra Fría y las Américas* (冷戦とアメリカ諸国) という著作の *Los contactos humanos y la "diplomacia cultural": Chile y la Unión Soviética, 1959-1970* (人的交流と文化外交—1950年～1970年のチリ-ソ連邦) という章を事例として紹介します。20ページの分量を有する本章で、ペデモンテはチリの歴史に関する論考でありながら、歴史に限定されるのではなくチリとソ連の相互の関係に関する政治史、社会史、チリの労働者階級、社会学、文化史、チリの詩、芸術、文学、チリの経済発展など、歴史は様々な分野と交錯します。

その他の点では、歴史学における柔軟性は空間的な限定性を超克いたします。特に国家の枠を超え、トランスナショナルな領域に拡大しています。ラテンアメリカ、アメリカ、一国ではなくより大きな範囲での研究が展開されております。ジェンダーの歴史、先住民女性の法的問題等については、一つの場所が対象ではなく、非常に広いエリアが含まれます。このような傾向は私が博士論文のテーマで扱いましたカナダにおける亡命チリ人の歴史研究についても顕著となりました。博士論文執筆に際しては、政治、特に60年代、70年代のチリとカナダの国家的、政治的状況、冷戦構造、社会学的な移民の受入れ、コミュニティ、芸術、文学、亡命者の詩、心理学、社会心理

学、トラウマ、亡命の影響など、移民における経済などに精通する必要がありますがありました。

現在、名古屋大学では歴史学者として紛争や紛争後の社会についての研究や教育に従事しています。一国に限定するのではなく、歴史学者としてウガンダ、シェラレオーネ、アルゼンチン、アフリカ、アジア、オセアニア、北米などの多様な地域の状況について考察を展開しています。政治、経済、社会組織、法、マイノリティ、先住民、記憶など様々な情報と連動しています。歴史学は現在、社会学、人類学、経済学など様々な分野と連動しています。ラテンアメリカ研究に従事する歴史学者はラテンアメリカを超え、歴史学を超えた貢献をめざし研究活動に従事しています。

「地域研究者としての二つの夢」

吉田 栄 人

私はここでラテンアメリカ文学研究の代表者として語るわけではないということを、まず最初にお断りしておきたいと思います。私が研究の対象としているのは、あくまで従来言葉を持たないとされてきたサバルタンの人たちの文学であり、マイナーな文学です。いわゆるラテンアメリカ文学はスペイン語とかポルトガル語とか権力をもった言語による、レトラーダスといわれる人たちによる文学であり、私が対象としているところは正反対のところにあると思います。レトラーダスの文学を研究していらっしゃる方には当然、別の世界が見えるはずですので、その点に関してはディスカッションの際にご議論いただければと思います。私はユカタンに関していろんな研究をしてきました。みなさんは私を人類学者だと思っていられることと思いますが、その私が何故先住民文学を研究しているのかそのきっかけからまずはお話ししていこうと思います。

これはメキシコあるいはラテンアメリカ全体に共通して言えることだと思うのですが、先住民文学というのは、多元主義、多文化主義あるいはイン

ターカルチュラリズムの一つの実践です。それは社会的実践、つまりイデオロギーが働く場ですので、いくらマイナーなものであっても、完全に無視することはできません。むしろそれを理解するための新しい言葉や概念、文学的手法の開発を求められる社会的スペースです。ユカタンでは80年代、民族的復権を目的として、伝説や説話などの口承文芸を収集して出版することが先住民文学の中心でした。2000年代に入ってから、作家オリジナルのテキストが生み出されていきます。当時私はまだ文学に全く興味がありませんでした。マヤの伝統文化に関する自分の研究のための民族的な資料として、そういったテキストを買い集めていました。私は2000年代の後半になってから先住民の文化復興運動、主に言語に関する復興運動に研究の軸を移しました。そんな中、2008年にソル・ケー・モオという女性の先住民作家が *Teya, un corazón de mujer* といった本を出版し話題になります。これは1970年代に労働組合運動を指揮していたある弁護士が暗殺されるという実際の出来事をマヤ語で書いた作品です。マヤ文化に関する記述が多少は出てくるのですが、それは作品の主たるテーマではないという点で先住民文学に対する多くの人たちの期待を良い意味でも悪い意味でも裏切った作品です。先住民文学でも普遍的な文学作品を書けることを証明したという意味で画期的な作品であり、高い評価をうけています。しかし、通常、先住民文学は美化された先住民世界を描くことがその主たる目的であるとされており、そうした作品を書くことにこだわりをもつ先住民作家たちはソル・ケー・モオの文学をよしとしません。また、一方で彼女も本質的な文化表象しか頭にない先住民作家を批判します。私が翻訳し昨年出版された『穢れなき太陽』は、そういった側面を理解した上で読むと面白く感じるだろうと思います。彼女が先住民文学の先端を行っていることは明らかですが、彼女のそういった言動もあって、誰も彼女の後について来ない。フィールドワークをする中で私はそういった状況を肌で感じてきました。独立独歩を貫く彼女は、インタビューを受けるたびに、自分はノーベル文学者を目指しているのだと公言してはばからない。これは、暗に、先住民作家たちなど自分は相手にしていないとい

うことです。私はその発言を馬鹿正直に文字通りに理解しました。そうか、ノーベル文学賞をとりたいのか、それならば世界中の人に読んでもらわないといけない。じゃ、彼女の作品は私が日本語に翻訳しよう、と。もちろん下手な翻訳で作品の価値を損なってしまってもともこもないのですが、とにかくやってみよう。そんなことを考える私は一体なんなのでしょう。単なるお人よしでしょうか？ そこはみなさんの評価にお任せしたいと思います。

いずれにせよ、ノーベル賞をもらうためには、作品が数多くの言語に翻訳されるだけではダメで、作品に対する評価が確立されていかなければならない。価値は作品がもっているというよりはむしろ作られていくものであり、本来作品に内在しているものであるにしても、誰にでも簡単に読み取れるとは限らないので、誰にでも理解可能な形で言語化されなければならないはずです。つまり、その文学的価値に気づいてもらわなければならない。ソル・ケー・モオの作品が持つ文学的な意義を説明し、それを広めていかなければならない。ノーベル賞の受賞を見据えた翻訳である以上、その責任も伴う。それが、私が文学研究に足を踏み入れることになった大きな理由です。

先住民文学の研究を始めた私は先住民文学という用語の持つ固定観念、とりわけ先住民文学というジャンルの大きな壁にぶち当たりました。文学研究は通常、人類にとっての普遍的な価値観というポジションから作品を評価します。言ってみれば、植民地支配のために地域研究を使用するようなものです。ローカルな事象は全て西洋の論理で測量され、マッピングされる。そうではないと言う方もいらっしゃると思いますので、それはディスカッションの際にお聞かせください。そういった文学研究によって、どんな辺境の地の未開の人たちのことであっても世界中の人がその特異な文化について知ることができるので、それはそれでいい事だと私は一応理解します。ただ、問題は、その測量が恣意的だということです。自分たちの興味のあること、意義のあることしか測量しない。先住民文学なんて普遍的な文学でもないし、読むに値しない。だから、売れないし、出版もされない。そういった先入観が日本には存在します。結局そういう文学作品を勇んで翻訳しても、なかなか

出版できません。翻訳は済んでいるのに眠ったままの本が現在6冊ほどあります。不思議なのは、実は不思議でも何でもないのですが、同じ先住民でもリゴベルタ・メンチュウなど、西洋で高い評価を得ているものは率先して出版されます。残念ながら、日本のラテンアメリカ文学研究者は西洋の後追いをしているだけなので、その傾向が強くならざるを得ません。

いずれにしても先住民文学の今後の隆盛を考えたときに、第二、第三のリゴベルタ・メンチュウが出てくることを私は信じております。しかし、そうした存在を発掘するにはローカルな文化をグローバルな言葉で語ることのできる地域研究者の存在が不可欠です。地域研究者であるみなさんには是非、そうしたローカルとグローバルの橋渡しのできる地域研究者として先住民文学を読んでいただきたい。手始めとして私が翻訳したソル・ケー・モオの『穢れなき太陽』を読んでいただきたいと思います。そうすれば私が今日言わんとしていること、また言えなかったことをある程度は感じていただけるのではないかと思います。また、できれば大学の図書館に入れていただき、学生にも紹介していただきたいと思います。そうすればソル・ケー・モオもノーベル文学賞に一歩近づくのかなと思います。私が30年近くにわたって研究してきたことを、少し掻い摘んでお話ししたわけですがそれでも、それは結局のところ私の夢物語です。

ノーベル文学賞をとるんだというソル・ケー・モオの言葉の誤読から、彼女の文学作品の翻訳を始めたわけですが、これが無謀な夢物語であるということは私も薄々気付いております。むしろ、実際のところは私自身が夢を見るために意図的に行なった誤読とすべきかもしれません。誤読ついですので、最後にもう一つだけ夢を追加しておきたいと思います。私がやっていることは、善意的に解釈していただけるならば、研究者による研究対象への一つの社会的な還元だと理解できるかもしれません。実際私自身、フィールド調査に対する恩返しとしてやっているという意識もないではありませんが、それはあくまでも外部の人間としての話です。一方で、私は一人の地域研究者として、フィールド内部の人間でありたいという願望も持って

います。つまり、現地の人たちと一緒にマヤ文化の生成に関わっていきたいとも考えています。これを研究者の傲慢もしくは不遜だと非難する方もいらっしゃるかと思います。結局のところ、これも私の夢物語です。いずれにしても、私は語る言葉を持たない人たちのために、地域研究者として私の持ちうる知識と特権を使って、先住民文学の研究をこれからも続けていきたいと思っています。

「ラテンアメリカ研究（考古学）——地域性と学際性を架橋する経験から導かれるもの」

中村 誠一

私の研究地域は、中米です。グアテマラとホンジュラスです。ホンジュラスは1983年から、グアテマラは2004年から関わっております。現在では半々の割合で両国において活動しています。私とラテンアメリカとの最初の出会いは高校生の時です。当時、歴史研究から、どちらかという文字のない時代に憧れていた私は、NHKの番組でマヤ文明のいわゆる大遺跡を特集した番組を見て、非常に憧れを持ちました。当時はまだ世界遺産という概念がありませんでしたが、現在の世界遺産にあたる大遺跡を、その番組は特集していました。そこで、将来漠然とした夢として自分で調査してみたいと夢を持ちました。その夢を追いかけて、現在はグアテマラのティカル遺跡と、ホンジュラスのコパン遺跡の二つの世界遺産で発掘調査をしています。

私の興味、専門分野は、コパン遺跡を作った王朝の前半の歴史がよくわかっていないのでその部分を解明することです。これはエジプトの巨大建造物、ピラミッドなどと違い、マヤ文明は重層的に古い時代のものを埋めて新しい時代のものを重ねていくという形でピラミッド状の建物が造られており、古い時代のものは壊されて埋められていることに由来します。80年代以来、アメリカ人たちの研究過程をつぶさに見てきましたが、考古学をやっているものとして、どうしても納得できない部分があり、考古学調査で研究

を続けています。

35年前のことになりますが、いきなり世界遺産を調査できたわけではありません。まず、現地でのつながりを、どうやって作れば良いかということで、当時、ラテンアメリカ研究の著名な増田先生に相談し、青年海外協力隊で現地に行けと言われてまして、このホンジュラスのコパン遺跡に初めて派遣されました。しかし新参者でしたので、コパンの調査はできず、60 km はなれた内陸部のラ・エントラダ地域の遺跡に派遣されました。150 km²の地域すべてを歩き遺跡を測量し、発掘などをふくめ6年半調査しました。そこで本シンポジウムのオーガナイザーの一人である池田光穂先生とも知り合いになりました。現地との関係性を非常に深めたのは、この6年半の調査の間です。

その後、JICA 青年海外協力隊を通して開発協力としての遺跡の調査、修復をやるという計画を作りまして、エル・プエンテ遺跡を選びました。ここでは実際5年間遺跡の調査を行いましたけれども、通常の考古学調査と違うところは、ラテンアメリカには、1967年のキト規範というものがあり、古代文明は国の重要な資源であり、その資源の調査は国の開発計画に位置づけることとなっている点です。その意味で、JICAの所属によって、開発協力という形で研究に従事しました。この遺跡は1935年にデンマークの研究者が発見してから約半世紀間手付かずだった遺跡でしたが、われわれが調査・修復し現在は遺跡公園になっています。

こういった調査を続けた後、ラテンアメリカ学会に参加させていただき、発表などもさせていただいておりましたが、この私の人生を大きく変えたのが、1998年カテゴリー5の台風がホンジュラスに上陸し、14,000人以上の死者・行方不明者が出たという出来事です。これによりすでに当時ユネスコの世界遺産に登録されていたコパン遺跡もかなりダメージを受け、ホンジュラス政府からコパン遺跡保存統合計画のディレクター就任の依頼を受けました。こうした形で、開発協力としての考古学を実践していったわけです。やはり、古代文明の巨大遺跡は、いわゆる科研費ではとても太刀打ちができな

い。大きすぎてお金が足りないので、開発協力との結びつきが大事だと考えています。開発系の銀行や外務省などの支援を受け、これまで調査を行ってきています。

今から8年前に出身校である金沢大学から、研究センターを作るので戻って来いというお話を受け戻りました。それからは大学を中心として現地の考古学調査を行っています。正攻法で、大学と現地政府との間で協定を結び、その上でやろうということで、学長にも現地に行ってもらい交流協定を結びました。それから外務省の支援を受け、現地にコパン文化遺産保存人材育成センターというものを作っていただきました。そしてその中に大学のリエゾンオフィスを設置し、研究教育拠点をつくり活動を展開しています。

私が大学で学生によく言っているのが、教室講義と現場実習の往還をしろということです。それは私の経験からきているのですが、現地の考古学をやるのに重要なのは、教室だけではどうしても学べないので、現地に行けと。しかし現地に行っても拠点がなければ何もできませんし、現地にただいるだけではダメです。ですから往還をするわけです。もう一つは、論文として残すだけではなく、何か実践的なことをやって現地に残す研究をやれと言っています。古代遺跡の研究を長くやってきたからなのかもしれませんが、廃墟というものは実際に目でみて手でふれることができるわけです。考古学であれば研究論文だけではなく、修復された遺跡を残すということです。学生教育の場合、それは特に博物館への協力という形でやってきました。大学院生のフィールド調査でも現地に渡って博物館改修計画に参加させたり、コパンに新しいデジタルミュージアムを現地政府と一緒に作る過程に実際に参加させたりしました。また大学院生で古代マヤのパトリという古代双六のようなものの研究をしているものがいまして、論文を書くだけではなく、現地の博物館の中に展示として残すということを行ったわけです。学部生のレベルでは、インターンシップ、異文化体験実習など2年に一度ホンジュラス、グアテマラに交互に渡り、博物館で展示協力をし、現地コミュニティと交流をし、現地の学生たちと交流を行なっています。実際、コパン遺跡のある町に

作られたデジタルミュージアムを拠点に、住民と交流をし、研究と実践の場としています。

グアテマラの方でも、金沢大学としてホンジュラスよりも早く、2011年6月に調査団が日本から来て交流協定を結び、世界遺産ティカルをターゲットにしてこうした活動を行おうと考えたわけです。やはり同じように遺跡公園の中にリエゾンオフィスを設置し、ティカル文化遺産保存研究センターを作り、ここを拠点にして自分たちの調査・研究を行う、それから現地の人材育成に協力していくということをしています。

現在一つ大きい活動としては、グアテマラでは JICA の事業に参入しています。これは非常に長いプロジェクトであり、2014年に始まり2022年までの、二期にわたるプロジェクトです。実際ティカルの中で活動をやっていますが、最近ティカルはものすごく観光客が多くなってきており、20万人から37万人まで観光客が増えています。しかし、そのティカルに行くまでに通過するコミュニティは貧しいままで、そのコミュニティの人々の生活を向上させるため、考古学を行う立場として、開発にも貢献しなければならないとして、JICA と連携して活動しています。我々は2022年に現地を引き上げるわけですが、それまでに、現地で持続可能な体制を築いてもらうために研究をしながら協力をしているわけです。

また隣国関係にあるグアテマラとホンジュラスとの架け橋になるようなプロジェクトの研修もコパンにおいて毎年行っていて、両国の間の交流の架け橋になっています。JICA 自体もグアテマラとホンジュラスの事務所間ではあまり情報交換などの場がありませんので、そういうところでも協力関係が構築されております。考古学と一言で言っても、遺跡の発掘だけでなく、こういうパブリック面、ソーシャルな面にまでタスクを広げているということをご紹介いたしました。どうもありがとうございました。

「私とラテンアメリカ研究と人類学」

小泉 潤二

私の専門は文化人類学です。ラテンアメリカ研究との出会いに関してですが、たまたま交換留学でメキシコへ参りまして、INAHで少し勉強いたしました。それまでは東京の山の手だけの生活でしたので、メキシコいきなり投げ込まれ、大変新鮮で、ショックを受け、大きな魅力を感じ、ラテンアメリカ研究に入っていました。こういった地域選択は人類学ではあまり珍しいことではないと思います。例えばハーバード大学のメイベリー・ルイスという研究者がおりますが、ブラジルのインディアンの研究をしてきた人ですが、もとは若気の至りのロマンティズムでブラジルを選んだといっております。クリフォード・ギアツという20世紀後半を代表する文化人類学者の場合はもっとひどくて、会う人ごとにどこで調査をするのかと聞かれるので、地域を選択しなければならないと思っていたときにある教授にインドネシア行きを紹介され、それに飛びついてインドネシア研究者となった。その後子供が生まれインドネシアに行けなくなった際、ある研究者からモロッコは気候もいいし景色もきれいだし、食べ物もおいしいといわれ、モロッコ研究を開始したということです。それでいいんだと思います。

しかし重要なことはどうしてその研究を続けたのか、という点かもしれません。私の場合は東大で修士まで通い、スタンフォード大学に留学し、博士課程のトレーニングのプログラムの途中で、強制的にトピックとエリアを選ばされることとなり、トピックとしてはシンボリック・インタープレティヴ・スタディーズを、エリアとしてラテンアメリカを選択しました。トピックに同テーマを選択した背景には私の指導教員のうち三人がクリフォード・ギアツの影響を強く受けた方々でしたので、解釈・理解というものが大きな研究テーマとなりました。フィールドワークは、グアテマラの北西部の農村地域に1976年に初めて行きました。最近はあまり行っていませんが、2012年まで断続的に住み込んだり訪問したりして調査を行って来て、その中で、

村の中で世界とグローバリゼーションを考えるということに結果的にはなりました。一番強く感じたのは、中心と周辺ということ、自分の行くところがどんな場面にせよ周辺であったということであって、一方で世界の中心みたいなアカデミックの中心みたいなところにもいたものですから、ある意味日本もそうですけど。その中心、周辺性とはなにか。そういったものはダイナミックに作られ続けているということですね。これを現場でもって直接体験するというのが一番大きかった。この地域では1960年代はじめから内戦が続き、80年代には大変な暴力の時代がはじまり、90年代には冷戦終結とともに、一応の平和がおとずれますが、政治的社会的不安が続く。そのような状況の中、急速にグローバリゼーションが進み、いったいそこで何が起きているのか、それらをどのように理解したらいいのか、ということをやなとかつかむということを試みてきました。具体的には現地において、先住民と非先住民の関係、両者の間の憎悪や差別、そうしたものを直接的また日常的に感じましたし、そうした中で自分自身と現地とがどういう風に関わるのか、どうしても考えることになりました。その時強く意識されることになったのは、ポジショナリティ、自分自身の政治性ということになります。そうした対立的状況の中で、現地と関わる、その場合、現地のどちらの部分、どの部分と関わるのかということ、またそういう現地というものを抽象化することはできないといった点も課題となりました。それらが非常にためらいとなりました。後に日本に帰ってからはJICAの開発研究プロジェクトにもかなりコミットしまして現地への調査団として現地との関わりを継続しました。しかし私自身はこういう方向ではないと感じたりもしておりました。

人類学というディシプリンと地域研究の関係ですが、日本学術会議では人類学は地域研究委員会の中に文化人類学分会が位置づけられておりますが、そういう位置づけではないと考えております。私としましてはトピックとエリアというこの二つの二次元的な捉え方。これが良いか悪いかは別として根本的な考え方になっています。具体的な現実と、理解するための理論と

言いますか、その間を行ったり来たりということになります。

学際研究についてお話ししますと、お手元の配布資料に書いておられますが、ディシプリナリー、インターディシプリナリー、トランスディシプリナリー、トランス・サイエンスという、最後のものは科学を超えてしまうということですが、このような一種の連続体という風に一応考えることはできますけど、その出発点のディシプリンということについて申しますと、人類学の場合あまりうまくないという風に思っています。人類学はディシプリンなのかということたぶん私はそうではないと思います。ディシプリンは語源としては、しつけ、訓練などを意味する言葉ですが、人類学の場合、あまりしつけられていないと思っております。いずれにしてもあらゆることが人類学とあらゆる分野で関わってきておりますが、昨日の分科会で「人類学があらゆる方向に拡散していくことについてどう思われますか」という質問をうけ、私は「それはそれで人類学の特徴ですし、良いことではないですか」と申しました。

一つだけエピソードをお話すると、オーストラリア原住民の社会組織の研究を母子二代でおこなってきたスタンフォード大学の人がインテルという企業に採用されたときの話です。その方はスタンフォードで研究員をしているときに、当時インテルは人類学者が役に立つというので、その方を含め 100 人をまとめて採用し、それによる IT と人間の関係に関する研究は大成功したそうです。研究の様子なども新聞などで報道された。その後、その研究者は世界をリードする 25 人の女性の一人として選ばれたり、ごく最近ではオーストラリア国立大学のビジネススクールや情報工学の分野に特別教授としてよばれ、同時にインテルの副社長やシニアフェローになったそうです。そのように融通無碍といえますか、不定形といえますか、それが人類学の長所であり短所であると思います。人間に関わることすべてが人類学と言えます。いい意味では柔軟、悪く言えば不定形、良く言えば全体的、悪く言えば拡散的、良く言えば意欲的、悪く言えば傲慢であります。人類学の学際的部分は、羊の羊毛部分に似ているかと思えます。羊毛の部分を刈り取ったら、中

身のマトンはそんなに価値がない。外部との境界部分である羊毛にこそ価値がある、人類学はそういうものじゃないかと感じます。その意味では人類学と他のディシプリンとの学際研究というのは論理矛盾ではないかと考えます。

今後のラテンアメリカ研究ではどうあるべき、というべき論は人類学にはあまりそぐわないと思います。人類学ではあまり考えてこなかったと思います。しかし一方、学際研究自体は非常に重要で必然性のある動向であると思います。それについてイメージを提供いたします。私は現在、IUAES (国際人類学民族学連合) という国際組織の会長をしています。そして別に WCAA (人類学会世界協議会) という世界 53 学会を集めた組織が存在します。これらが今後統合され WAU (世界人類学連合) となります。人類学とは非常に不定形で中身は本当にバラバラで、それ自体が学際性そのものなのですが、それを全部まとめてですね、一つの統合的なものをつくる。実際は統合ではなくそれぞれ自由なのですが。その一方で、学問の水平性と言いましょ、欧米的中心性、欧米中心の知の生産体制に対する批判として、全世界の研究者が連携するためにこのような統合を推進することとなりました。また他の学問分野においても様々な統合が進みつつあります。社会科学における ISSC (国際社会科学協議会) と自然科学における ICSU (国際科学会議) も、ISC (国際学術会議) として統合されることとなります。日本学術会議もフランスアカデミーもアメリカンアカデミーも、人類学も地理学も心理学もすべて参加いたします。そのように学際領域、学際組織、学際活動という方向性が強く進展しており、学際的であるべきか、ということについては、単に問題提起するレベルを超えた動きがあるという風に思います。私自身はですね、学際研究というのはあまり意味がないと言いましたが、これは非常に大きな意味があってですね、一つ目は人間科学研究、つまり社会学、心理学などの融合を目指すということ人間科学研究科でずっと研究してきました。それから、大阪大学の研究教育の管理に当たったんですけど、主専攻、副専攻という形でもって学際的教育プログラムを組み込みました。

ラテンアメリカ研究は残念ながらまだ入っていません。さまざまな分野の学生を集めて新しい大学院教育をするということも始めました。

人類学以外のことをやってきて感じる結論としては、学際研究には極めて素晴らしい可能性があるということです。必然的なものになってきている。ただそれは、学際的であるべきというのではなく、どこについて学際的であるべきか、そこについて知ることが難しいと思います。有効な限りにおいて、そこにおいて学際的である、有効じゃなければその必要はない、と単純な結論に達することになります。したがってラテンアメリカ研究については、どのような学際が有効なのか、イマジネーションをもって試行錯誤していく。やってみなければわからないという風に思います。以上です。

.....

井上大介： それでは、定刻になりましたので、後半の部分を開始したいと思います。まず、コメンテーターとして、明星大学副学長、一橋大学名誉教授である落合一泰先生にご発言頂きたいと思います。よろしくお願い致します。

「コメント：過去 30 年の変化と無変化」

落合一泰

こんにちは、落合です。皆さんのお手元に、昔の新聞記事のコピーをお配りしました。今から 29 年前の 1990 年 6 月 2 日・3 日のこと、本学会第 11 回定期大会が東大駒場キャンパスで開催されました。この記事は、その時のシンポジウム「日本におけるラテンアメリカ認識とラテンアメリカ教育」の報告です（落合一泰「ラテンアメリカ学会十周年大会 視野広い研究めざす」『朝日新聞』インタナショナルスクエア米州版、1990 年 6 月 22 日。同シンポジウムについては 1990 年 7 月 20 日発行の本学会『会報』34 号が詳報）。

1990年のシンポジウムのテーマは「日本におけるラテンアメリカ認識とラテンアメリカ教育」でしたから、今回の「ラテンアメリカ研究——地域性と学際性を架橋する経験から導かれるもの」とは異なります。しかし、このように記録をたどってみますと、私たちは折に触れ、何を目指してラテンアメリカ研究を行っているのか、それをどのように自己評価・自己批判すべきなのかを考えてきたことが分かります。

昨年、『ラテンアメリカ研究年報』第38号に「AJELの歩みを振り返る」と題する、本学会設立時からのベテラン会員による二つの座談会の記録が掲載されました。座談会では、本学会の誕生についても話していただきました。出席者はそれぞれの専門分野に即して語ってくださったのですが、自分がどのように学問を作ってきたのか、関心の中心はどこにあったのかなど、個人史的な背景までお話しくださいました。

そこから見えてきたのは「時代」でした。学会設立時に先んじてラテンアメリカ文学のブームがあったこと、第三世界論や「解放の神学」、キューバ革命などが自分の世代の知的認識や学問的営為の背景にあったことなどを、いま60歳代後半から70歳代の出席者は口々に語っていただきました。

今日のこのシンポジウムでも、おひとりおひとりが個人としてどのように学問を形成し深めてきたかを発表なさいました。ディシプリンという言葉も出てきましたが、私は、強く個人に根差す学問的営為を重ねていらしたことに改めて印象づけられました。

先ほどの新聞記事に戻りますと、日本のラテンアメリカ研究には外部への広がりを持つ学問が少ないという指摘が、1990年の段階でなされていました。そこには、他地域研究との交流の活発化もさることながら、哲学研究、知識人論のような地域を超えた学問に取り組みないと、どうしても内閉的なパロキアルな研究にとどまってしまうのではないかという厳しいコメントもありました。爾来30年近く経過し、日本のラテンアメリカ研究のそうした課題は解消されてきたかといえば、地域学会同士の相互関係も含め、肯定しがたいところも多いようにも思われます。

ただ、時代は移り変わってきたとも思います。例えば、日本とメキシコの間で2004年に経済連携協定が締結されてから両国の経済関係が緊密になり、学生を含めた人間の往来も拡大しました。協定締結から数年の間に貿易総額は270%以上になり、大学間交流協定も大幅に増えたそうです。可視化されにくい部分も含めれば、両国関係は深まってきたという印象があります。

日本におけるラテンアメリカ研究や教育を考える際、若手の間でアメリカ経由の関心が生まれている点にも注目すべきだと思います。ヒスパニック文化への関心を入り口に、スペイン語世界やラテンアメリカ文化・社会の理解に向かおうとする動きです。さまざまな音楽や舞踊、スポーツや食文化などがラテンアメリカ研究へのゲイトウェイになることも少なくないようです。しかも、ラテンアメリカの人々が世界中に移民してその文化的社会的飛び地を各地に作り、定着して世界大のラテンアメリカ文化圏を形成するようになったことに興味をもつ若手もいます。これからは地域を超えた地域研究、ラテンアメリカ地域を飛び出したラテンアメリカ文化研究が生まれていくことでしょう。

また、日本のラテンアメリカ研究者が、国と国を結びつける活動に深く携わるようになってきたことにも注目したいと思います。先ほどの中村さんのお話が、まさにその好例でした。これはディシプリンを超える、世界大の知的領域に踏み込むということとは別の、文化外交的活動を主導する事例だと思います。ラテンアメリカ各国に派遣された青年海外協力隊はその嚆矢であり、中村さんを含め多くの研究者を育てただけでなく、そのミッションを引き継ぎ拡大して国と国との協力関係や相互理解促進活動に従事してきたことは、たいへん重要だと思います。東京大学アンデス調査団やその後継調査団の学術と文化外交を結びつける活動にも、目覚ましいものがあります。

最後になりますが、1971年に始まった日墨交流計画（現在は日墨戦略的グローバル・パートナーシップ研修計画）が日本のラテンアメリカ研究に与えたインパクトを評価すべき時期になっていると思います。ほぼ半世紀の間に、両国の若者約5,000人が相手国で学んできました。本学会会員のなかに

も、このプログラムの元留学生が大勢います。このプログラムを長期的な文化外交ととらえるなら、その成果を検証し、日本のラテンアメリカ研究にどのような影響を与えてきたのかをきちんと把握しておくべきではないかと思っております。

池田光穂：本日は大変多様なラテンアメリカについてのお話がありました。シンポジウムの企画においては、大きな地域研究の枠組みがあるという話からではなく、個人の経験からラテンアメリカの個別の世界を描写したいと願うことにいたしました。多分、こういう語り口というのはひょっとしたら大学のキャンパスの中でも聞けるかもしれません。つまり、ラテンアメリカ入門の講義の中で、政治学でも人類学でも、文学もそうかもしれませんが、先生方がどうしてその学問領域に関心を持つのかというそういうところから始められて、本題に入って行くわけですね。

他方で、ラテンアメリカ研究という地域学会というのは、それぞれのディシプリンの人が集まって、それで、まあいわゆる学際的な、実際には、それぞれの分科会で、それぞれのディシプリンの専門家の先生方が発表を聞いてディスカッションをするという、不思議な、あの、地域研究という大きなプラットフォームの中に、それぞれの中にセルがあって、それぞれの中でお話しするという形式が保たれています。それぞれの時代、社会、それからそれぞれのテーマによって何か基調講演とか、あるいは、学会によっては統一的なテーマを決めて、それに即しながら一般発表を募集したり聞いたりするという一つのテーマ性というものがあります。相変わらずそのあたりのそれぞれのディシプリンによって、集まってコミュニケーションしているようでないという不思議な連帯感と疎外感がございます。

私自身もラテンアメリカ学会の会員だという意識がありますので、是非、この壇上に登壇されている先生方は著名な先生方ですしユニークな研究もなさってこられておりますし、誰に伝えるかということもございますが、特に次世代のラテンアメリカ研究者に、あるいは、実際の若い研究者に対し、なぜそういう学問を続けていくのか、どうしてそのフィールドで続けるのか、

といったメッセージを発信していただきたいと思います。何かしら魅力があるからこそ、先生方は今日ここまで至っているということだと思います。

というわけで、個別の発表についての2~3の質問がありますけれども、全ての先生方に対して質問があります。これは一番最後に持っていきたい話題なんです、ラテンアメリカ研究を目指す学生、または、若手ラテンアメリカ研究者に期待することは何かありますでしょうか。最後の部分ではその質問に関して、若いラテンアメリカ研究者にメッセージを発信していただきたいと思います。

その前に、個別の質問が3件ございました。一つは、中村誠一先生に、メキシコ政府のグアテマラ、ホンジュラスに対するマヤ文明の調査研究に対する立ち位置というのはどのようなものなのでしょうかとということであります。それから、大串和雄先生には、没ディシプリン研究を恐れるなという言葉に励まされまして、他の分野の方に自分の研究の面白さを伝えるにはどのような方法があるか、工夫をすれば良いかという質問がありました。それにまずお答えしていただきたいと思います。それでは、まず、中村先生お願いします。

中村誠一：私が知っている限りでは、外務省がやっている短期の交流プログラムで文化遺産のものがありますので、2年前にそのプログラムで外務省から派遣していただきまして、現地メキシコの人ともお話しさせていただきました。JICAからメキシコの国際開発局に専門家をずっと送り込んでいまして、メキシコから中米諸国へ支援するという南南協力というものを推進しています。例えばホンジュラスであれば、メキシコの国立人類学歴史学研究所から、定期的に専門家を送って、既に指導を開始しているという状況です。グアテマラに関してもそういうことができるかどうかですが、まあマヤ文明は5カ国にまたがっていて、それぞれメキシコに対する考え方が違いますから、グアテマラ、エルサルバドルに関しましては、まだちょっとわかりません。しかし、ホンジュラスに関しては少なくとも南南協力でうまくいって

ますし、今後ともうまくいくと思います。以上です。

大串和雄：他分野の人に自分の研究の面白さをわかってもらうにはどうすればよいかというご質問ですが、これは大変難しい課題だと思います。「他分野の人」が学生なのか研究者なのかによっても異なると思います。学生に関しては、私の授業アンケートでは「配布物が適切だった」というのが結構目立ちますが、一番肝心の「授業を受けてこの学問分野をさらに勉強したい気持ちになったか」という設問には低い数値がしめされますので、私の授業に根本的な欠陥があるのではないかと考える次第です（笑）。よい方法があれば逆に教えていただきたいと思います。他の研究者については、私は政治学でラテンアメリカがフィールドですが、他の地域の政治を専門とする研究者との間では、テーマの共通性があれば面白いと思ってもらえると思います。私が他の地域に関する研究の発表を聞きますと、目から鱗が落ちるような感覚がありますので、他の研究者もそうではないかと思っています。政治を専門としない研究者に政治を面白いと思ってもらうのはもっと難しいかもしれません。政治って誰にでも面白いと思ってもらえるものではないような気がします。これはもう、具体的な研究テーマに即して、いかにそのテーマに興味があるかを説明するしかないかなと思います。これも名案があれば、むしろご教授下さい。

池田光穂：実はもう一点質問があります。フランシス・ベディ先生に対してなんですが、ご質問の内容が、落合先生、小泉先生、そしてベディ先生に関連するものですが、よろしくおねがいます。この質問は、ラテンアメリカの地域性を理解したのですけれども、ご自身のそういう理解がわりとメキシコベースのラテンアメリカのイメージだったので、そういうものをもう少し相対化するにはどうすればよいか。地域性の比較によってラテンアメリカの特質性を浮かび上がらせるそういうアイデアがあればいただきたいということです。では落合先生どうぞ。

落合一泰：ご質問をありがとうございます。「ラテンアメリカの特質」とは、ラテンアメリカ研究の内部と外部による共謀論なのかもしれません。さきほどご紹介した1990年の本学会シンポジウムで、松下マルタ先生が日本ではラテンアメリカを一般化しすぎだと批判しました。また、大貫良夫先生もラテンアメリカの紹介は先住民文化の紹介とイコールになりすぎていると指摘しました。それは、ラテンアメリカを自分が理解し社会に理解してもらうために、世界の他地域との相違を際立たせ、かつ内部的均質性を当然視するという論法をラテンアメリカ研究者自身が採用してきたことに対する、ラテンアメリカ研究者仲間からの批判でした。

他方、非ラテンアメリカ研究者からも「ラテンアメリカの特質」論が出てくることがあります。1960年代だったと記憶していますが、イギリスの社会学者ドナルド・ドーアが「ラテンアメリカニストという言葉はあるけども、対応する概念はアジア研究にはない」と言いました。アジアの場合、日本研究者、フィリピン研究者のような個別の呼び方はするけれども、アジアのなかで文化や社会制度などの相違が大きいことから、「アジア研究者」を標榜する学者はほとんどいない、と。その点ラテンアメリカの場合は、ペルー研究者、メキシコ研究者と自らを規定する人がラテンアメリカニストと自称してもまったくおかしくない、と。まあ、メキシコ研究者という言い方も、ラテンアメリカニストという呼称とおなじくらい大括りであり、中身がよく分からないのですが。

こうしてみますと、ラテンアメリカ学界の内と外の合作ないし共謀として「ラテンアメリカの特質」なるものが成立してただけだったのではないかと思わされます。そのような実体があるとしたほうが、研究者は自分を位置づけやすかったのかもしれない。

私は「ラテンアメリカの特質」を架空として頭から否定するより、この現象を迂回する方法を模索したほうがよいと思っています。たとえば、他地域との相違の強調より対話を、内部的均質性への疑義を、学際的アプローチに基づく客観的視野を、非西洋文化圏の地域研究に西洋近代科学の認識枠を応

用することへの疑義を、というような地域間、地域内、専門分野間、認識等における「越境」の試みです。

興味深いのは、研究者が新たな姿勢をとるより早く、現実が動いたということです。先ほど触れたように、ラテンアメリカから世界各地への人々の移住が「ラテンアメリカ文化の世界化」を引き起こし、研究者より現実のほうが早くに「越境」を成し遂げてきたように見えるからです。

池田さんは「地域性の比較」をご提案ですが、厳密な意味での「比較」は非常に難しい方法論を必要とします。もう半世紀以上前のことですが、アメリカの人類学者フレッド・エガンが「統御された比較法」という論文を書いています。比較を行うにあたり、そろえるべき前提条件とは何かを考察しています。ラテンアメリカ各地を調査している研究者は地域差を感じ取っているかもしれませんが、厳密な学術的比較を行うのは、なかなか大変なのではないかと思います。

小泉潤二：ごく簡単に申しますと、ラテンアメリカの特徴とか特殊性とかいう考え方自体を問い直した方がいいかもしれません。人類学でよく言われますが、本質化しなくていいと思います。とにかくものすごい多様性です。ホンジュラス、グアテマラなど全く違う枠組みで捉えなければなりません。ですからそれぞれの現実を理解するために、概念枠組みを使用する必要がありますが、その概念枠組みは常に個別の現実フィードバックしていかなければならないということです。ですから、ラテンアメリカという概念枠組み自体も初めから手放して使わない方がいいと思います。常にクエスチョンマークといいますか括弧に入れておいたほうがいいのではないかと思います。アジアという枠組みに関してはそういった多様性が常識的に理解されています。ただジャパノロジストという言葉は存在していたりします。いずれにしても概念については常に注意を払うべきだと考えています。

フランシス・ベディ：どういう風に答えればいいのかわかりませんが、みんな

なそれぞれが自分の興味を持っているので、ラテンアメリカの文化、音楽、小説、テレビ番組とか、そこから勉強したりするのかと思います。個人的にメキシコに住んでいたのも、実際にその文化の中に住んで、興味が湧きました。あと、とにかく歴史が好きだったので、メキシコの歴史をもっと詳しく知りたいと思いました。やっぱり、大学で、サークルとかの影響が大きいと思います。南米の音楽サークルとかありましたら、興味が湧くかなと思います。以上です。

池田光穂：有難うございました。では次に太田先生から順に、ラテンアメリカ研究者に期待すること、あるいはメッセージをお願いしたいと思います。

太田好信：大切なのは、どういう人たちがどういう意見を持っているのか、そして自分はどういう問いかけをするかということについて意識すべきである、という点です。自分がやろうとしていることに対し、さまざまな逆方向からの主張もあり、そのような見解との間で交渉（ネゴシエーション）を迫られていると思います。例えば、先住民との関係でいえば、自分が大切にしてきた文化人類学という学問は、先住民にとり負の遺産にすぎないという可能性があります。そのような状況下、これまで通り文化人類学の研究をおこなうのは問題があるでしょう。だからといって、わたしは現在にネガティブな意味合いだけを見出しているわけではありません。複雑な関係性の交渉から、新たな問いかけ、新たな考え方が生まれてくる可能性もあるでしょう。そうやって、文化人類学は変容してきたことも確かですから。

大串和雄：メッセージと言われて私が思い出したのは、大学院に入ったときに増田義郎先生から、「みなさんはどうせ優秀ですから、そこはいいとして、ラテンアメリカを好きになってください」と言われたことです。ただ今考えてみますと、大体地域の勉強を始めればその地域を好きになりますので、それは言わなくてもよいかなと思います。先程落合先生から言及された、ラテ

ンアメリカを一般化しすぎということについて、個人的な経験をお話しします。私はペルーが専門で、ペルーに関してならそれなりに詳しいですが、他の国になると少し怪しくなります。しかし「ペルーの政治」という授業科目はありませんから「ラテンアメリカの政治」を教えるわけですが、無意識にペルーの常識でラテンアメリカを見てしまうところがあります。一応何冊か概説書を読んでいてもそうなります。しかし最近コロンビアの研究を始めまして、コロンビアの通史を読んでみたら、知らないことが多いと感じました。さすがに20世紀後半以降の政治については新しい発見はそれほどありませんが、それ以前の時期や政治以外の事柄についてはいろいろ発見がありました。ただし通史を読んでも現在コロンビアに住んでいる人々の考え方、感じ方についてはわからないので限界もありますが。とにかく、いきなりどこかの地域と比べてラテンアメリカの特殊性を考える前に、ラテンアメリカの中で自分の知識の薄い国について通史などを読んでみるとよいのではないかと思います。

フランシス・ベディ：ラテンアメリカに興味を持っている生徒が、もっと詳しくラテンアメリカについて勉強したらどうでしょう。一般人はラテンアメリカのイメージは暗い、貧しい、怖いというステレオタイプがあると思いますので、一番役に立つのは、そういうもっと詳しい人と詳しくない人とがコミュニケーションをとったら、あるいはラテンアメリカにはいろんな文化があるということをもっと詳しく教えたら、社会的に役に立つと思います。

吉田栄人：ラテンアメリカを勉強している生徒を教えていないので、あまり思い浮かびませんが、まあ、既成概念を疑えということに尽きると思います。

中村誠一：我々が現地調査をやっていた時代と違って、現地の状況は厳しくなって治安も悪くなっています。ですから、学生さんたちはそういうことに

気をつけつつも、現地に入り、しかもできるだけ長い間現地に入り、現地の人々及び現地政府、そして日本に対して、どの分野であっても貢献のできる研究をしていただきたいと願っています。

小泉潤二：三つのJということを行っています。一つ目は、情報、二つ目は、これが一番大事なのですが、自由、三つ目は、情熱ですね。私は自由が一番大事だと思っています。若い人たちが一番やりたい研究を自由にやってほしいと思います。しかし、太田先生もおっしゃったように、それだけで完結できない時代になってきているのが極めて重要です。それも含めて海外に行く。そしてそれが学際的であるかないか、これも自由であると。テーマの設定についても自由であると。それが一番重要だと思います。

落合一泰：ペディさんはカナダ、ラテンアメリカ、日本の間で生きてこられました。人類学者、川田順造さんの言葉を借りれば「知の三角測量」です。これは地域研究者には大切な姿勢ではないかと思います。生まれ育った土地と研究対象地域のほか、どこかもうひとつの地域に一度は没入してみようことを勧めたいと思います。

池田光穂：有難うございました。それでは、本大会の企画・立案をしてくださいました、井上大介大会会長にも未来の学生へのメッセージをお願いします。

井上大介：有難うございます。学部の際に、ラテンアメリカの研究に興味を持ちまして、きっかけは落合先生の本に書かれた本に触れたことです。落合先生が講演会にこられるということで上智大学に行きまして、そこで情報交換して、そのあと当時茨城大学にいらっしやっただので、そこまで訪ねて行きました。メキシコの大学院に進学したいので、国費留学を受けるため大学の先生を紹介してほしい、受け入れ先を紹介してほしいとお願いして、その結果、

アナバージャー先生を紹介していただきました。彼女をつたってメキシコに進学して、修士、博士課程を終えて、約11年間メキシコに滞在して、様々な研究に従事しました。その意味では、やはり関係性という話が出たと思うのですが、その、人間と人間との関係性、それは必ずしも現地あるいは先住民の方に限ったものではなく、我々が人間として営んでいる様々な活動の中では必ずその関係性によって新たな価値が作り上げられていく。また、その逆も然りだと思うんですね。特に、学問の世界は小さい世界です。世界中の研究者を合わせても無限の数がいるわけではないので、一人一人の研究者に対して誠実に接していく。その中で、現地の人とも友情、信頼を築いていくという、どこまで行っても人間としての営みが大事なんだということを意識して今後も研究活動を続けていきたいなと思います。私自身若手ですので、今日は本当にたくさんの方の事を学ばせていただきまして、心から御礼申し上げます。有難うございました。

池田光穂：有難うございました。ところで2008年に出版されました『エンサイクロペディア・オブ・ラテンアメリカン・ヒストリー・アンド・カルチャー』という本の中にラテンアメリカという項目があり、その中でラテンアメリカという用語が非常に不思議な出自を持つ言葉であるということ学びました。ナポレオン三世のフランス第二帝政時代にパン・ラテン・ポリシーというものができ、それがフランスのメキシコへの政治的介入につながるのです。その際に、ミシェル・シャバリエという歴史学者が、「ラメリク・ラティーノ」という概念をだしたということです。そこから数え160年、日本ラテンアメリカ学会の創設から40年、つまり四分の一の時代をこの学会が研究を担ってきたわけですが、節目ごとにシンポジウムや分科会などでラテンアメリカ研究とは何かといったことが問われ、議論が重ねられてきたわけです。今後5年後、あるいは10年後にも再びこのような議論が交わられると思います。そこに登壇するメンバーに関してはその出自に関わりなく、日本という政治・社会的空間の中で、ラテンアメリカの人と世界を想

像すること、想像するとは勉強することですが、それが常に問いなおされるかと思います。その意味では、ラテンアメリカ学会とは、出自のときからなぜラテンアメリカなの？ と問われ、それに対する主張があり、そして厳しい批判、相互批判があったと思います。今日の議論はなかなか談論風発とまではなりませんでした。場外でも引き続き、議論を展開して参りたいと思います。本日は長時間、ご登壇いただいた先生方、またお付き合いいただいた皆様に感謝したいと思います。本日は大変有難うございました。